愛知県立芸術大学　令和元年度「教員による自己点検・評価シート」（自己評価）記述についての報告書

大学評価委員会自己点検評価専門部会

愛知県立芸術大学（以下、「本学」と記す。）では、「教員による自己点検・評価シート（以下、自己点検・評価シート）」を平成 21 年度より実施しています。年度当初に各教員（客員教授を除く専任教員）が各自、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「地域貢献」について目標と計画を立て、当該年度末に自己評価をするものです。

「令和元年度自己点検・評価シート」は、各教員が年度当初に「計画・目標」を記載し、それをもとに令和２年２月に「実績・自己評価」を記入して提出しました。

以下は、令和元年度の「教員による自己点検・評価シート」の報告です。

■美術学部

美術学部では専任教員（客員教授・育児休業 1 名を除く）47 名中 47 名の教員が「自己点検・評価シート」を提出しました（回収率 100 %）。

・研究活動

各教員は「計画・目標」において、それぞれの専門分野における研究内容や具体的な制作・研究成果の発表（展覧会・学会活動・科学研究等）・海外研修・受託事業・産学連携事業・研究論文・プロジェクト研究などについて記述しました。「実績・自己評価」については、大半の教員が「計画どおり実行し目標を達成した」あるいは「おおむね達成した」とする評価をしています。記載内容からすべての教員が積極的に創作研究等の発表を行っていることが伺えます。しかしながら「精いっぱい努力はしているものの、成果として目に見えるものが少ないと思う。」と記載した教員、他にも研究内容と社会的評価が直結しない難しさを感じている記載も極僅かですが見受けられました。どの教員もそれぞれに課題や問題意識を抱えながら研究活動に真摯に取り組んでいることが読み取れます。

・教育活動

各教員は「計画・目標」において、学部、大学院、他大学での授業科目を列挙して計画を示し、その目標を「個性を尊重し、その能力を引き出す。」と記述しました。国際交流による学生の派遣や留学生の受け入れ、海外での発表活動に積極的な参加を促すなど、実践的で学生のニーズに応じた指導が多く見受けられます。また、記載内容から大学院博士前期課程・後期課程における指導の重要度が増していることが窺えます。特に博士後期課程においては領域を横断した指導内容が増加し、教員も新たな対応が求められています。多くの教員が「実績・自己評価」において、「計画どおり

実行し目標を達成した」としています。その内容としては授業評価アンケートの実施結果や学生が得た社会的評価を成果・実績とした記載が増えています。また、「学生の個性の応じた指導」という文言が多く見受けられます。これらのことから教員が親身になって学生と共に研究活動に取り組んでいることが伝わってきます。

・大学運営

各教員は「計画・目標」において、担当する各種委員会、役目などを記載しました。ほとんどの教員は複数の委員会を兼任し、委員会にまったく関わらない教員はありませんでした。「実績・自己評価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、大半の教員が「委員として大学運営に積極的に従事した。」と記載しています。芸術講座の企画・開催や国際交流にかかわる業務、オープンキャンパスや入試広報業務の負担が増えています。特に受験生の減少や高等学校における美術授業の削減などにより、美術家のある高等学校への大学出張授業の増加など若い教員を中心に美術の啓蒙活動に対する意識が高まっています。また卒業生の創作活動の場の確保や美術家としての自立支援としてサテライトギャラリーや大学連携プロジェクトなどの活動が注目されています。

・社会貢献

各教員は、各種審査委員、学外講師・講演、展覧会企画・運営、サテライト講座、文化財団などの委員、ギャラリートーク（アーティストトーク）、ワークショップなど、様々な形で本学の教員として社会に関わり地域貢献に努めています。地域関連事業、地域再生の取り組み、子供教育講座や障害者美術教育支援など社会から求められる内容も幅広い項目にわたります。どの教員も各分野の専門家として社会とかかわり、地域も東海三県から関東、関西、広島、北海道など全国的に活動が見受けられます。記載内容からは地域関連事業における愛知芸大の関わりが緊密になっていることが窺えます。

■音楽学部

音楽学部では専任教員 36 名（教授・準教授・特任教授）中 36 名の教員が「自己点検・評価シート」を提出しました（回収率 100 %）。

・研究活動

各教員は「計画・目標」において、それぞれの専門分野における研究内容や具体的な創作・研究・演奏会・学会活動・執筆・プロジェクトなどについて記述しました。「実績・自己評価」については、大半の教員が「予定通りおこなった」あるいは「計画以上に達成した」とする評価をしています。自ら年度当初に立てた研究目標の達成度・内容について個別に評価している教員が多く、客観的な記載が定着してきました。

・教育活動

過半数の教員が「計画・目標」において、学部、大学院、他大学での教授科目を列挙して計画を示し、その内容と目標を記述しました。「実績・自己評価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、９割程度の教員が「高い評価」「概ね充足との評価」をしています。輻輳する委員会や学内業務に時間を取られ、新たな教育活動への取り組みを企図しつつ達成半ば / 時間不足である、とした教員もいました。実技指導が根幹となっている現場での教育の難しさを感じましたが、全教員が真摯に教育に取り組んでいることが明示されました。

・大学運営

各教員は「計画・目標」において、担当する各委員会、役目などを記載しました。ほとんどの教員は複数の委員会を兼任し、委員会にまったく関わらない教員はありませんでした。「実績・自己評価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、大半の教員が「積極的に取り組んだ」と自己評価しています。多くの委員会を兼務している状況も明らかになりました。大学メールを活用した業務効率化が進んでいますが、より緻密な連携により教員間・教員と事務方の協働を推進する環境が望まれます。

・社会貢献

各教員は、コンクール審査委員、学外講師・公演、演奏会企画・実行委員、文化団体主催講座、 行政機関諮問委員、ワークショップなど、様々な形で地域貢献に努めています。貢献のありようはローカルなものから全国的な規模のものまで多岐にわたっています。「実績・自己評価」において、９割近くの教員が高い評価と中程度の評価をしました。

■まとめ

本学の教員評価規程に則って、令和２年３月 12 日に、「自己点検・評価シート」を主たる資料として当該年度の教員評価対象者が選考され、26 名（美術 15 名、音楽 11 名）の教員が今年度の教員評価対象者として選出されました（評価対象者は全教員の 31.3%）。

この「自己点検・評価シート」の記入は平成 21 年度から始まり、十年を経て本学教員の自覚的な取り組みの中に定着してきました。表記の内容・分量などが過不足なくなされ、提出期限についてもほぼ守られています。

各自が自身の活動を大学における職務に生かすために点検・評価をし、自己の向上と大学の質の保証に努めるという「教員による自己点検・評価」の大目的が達成されていると思います。